

「授業経験を語り合い聴きあう」授業研究のころみ

～埼玉県小学校家庭科教育研究会 鴻巣地区のとりにくみから～

A Trial Study of Classes with Discussion

～ Through the case of Ko-nosu elementary home economics group ～

河村美穂*¹ 中野玲子*² 田中美里*³ 加藤久子*²
(久保)

Miho KAWAMURA

Reiko NAKANO

Misato KUBO

Hisako KATO

I. はじめに

昨今、学校の先生の多忙化が問題にされる。書類作成の煩雑さ、会議の多さ、実質的な勤務時間の長さ。それでも、先生たちは元気である。子どもたちのことを語るとき、授業のことを話するとき、先生たちは生き活きとしている。これは、埼玉県小学校家庭科研究会の鴻巣地区の授業研究に参加させていただく中で感じていることである。この研究会は小学校の家庭科主任を参加者とし、長年にわたって授業研究に取り組んできた会である。とくに、家庭生活を対象とした家庭科教育の授業研究であることや、参加者が女子教諭のみであることから、生活経験をふくめて自由に語り合う点が特徴である。2004年度以降は、さらなる研究の深化を旨として、教員同士が学びあう方法として、アクションリサーチを取り入れた「授業経験を語り合い聴きあう」授業研究をころみている。本稿はその教師の学び合いについて報告するものである。

アクションリサーチについては、家庭科教育においてもすでに研究報告がある(伊藤 2004)。教師自身による授業研究の方法として欧米では広く知られており、その依拠する立場によっていくつかの方法があるが、いずれも、教師自身が自ら課題を発見し、それを解決していこうという営みであるといえるであろう。アクションリサーチでは、研究者としての教師 (teacher as researcher) が重視される(伊藤他 2003)。実践者としての教師と両立する「研究者としての立場」が重視されるのである。さらに、この研究方法では、教師がひとりで授業研究をすすめるというよりは、教員同士、または研究者を含めた複数の教員のグループで、それぞれの実践を題材とした学び合いが行われる。その場合、教員同士の関係および、研究者と教員の関係がクリティカルつまり対等であることが非常に重要とされる。¹⁾

この研究会では、毎年公開授業の発表者を決め、他の参加者がサポートするという形で12月の公開授業研究会を行っている。忙しい勤務の傍らであるため集まる回数も限られている。私が参加した2004年度より前は、その年の発表者(授業者)が作成した指導案を、みんなで話し合いをしながら修正していたが充分ではなかったとのことであった。

*¹ 教育学部家政教育講座

*² 鴻巣市立田間宮小学校

*³ 川口市立芝富士小学校

そこで、私（河村）が提案したのは、アクションリサーチの変形版とでもいうものであった。アクションリサーチでは、通例参加者全員が一つのテーマを共有し、各自がそのテーマに沿った授業を実践することを通して、議論を深めながら自身の問題や課題解決の方法を発見していく。ただし、今回の研究会では、この一般的な方法を行うには、いくつかの制約があると思われた。一つは参加者数が多いということ。通常10人以上の参加者がおり、話し合いを進める規模として大きすぎるのが問題であった。さらに、もう一つはその後の研究会の予定が多くはないということ。例年であれば、12月の公開研究会の前に1、2回指導案についての話し合いを持つだけであるという。この点に関しては、教員の多忙化、勤務時間内にこのような研究会を設定することができないという厳しい状況からすれば、研究会の回数を増やすことは困難であろうと思われた。そこで一般的な方法を柔軟に運用しようとしたのである。アクションリサーチ変形版は以下に示すものである。

- ①すべての参加者が、当該の授業に関してこれまでの授業経験を持ち寄って話す。その際に、おおまかな授業の流れがわかるような指導案またはメモを用意し、児童の様子がよくわかるように語る。
- ②話し合いの中から、当該の授業を進める上でのポイントを探っていく。
- ③授業者の指導案について議論することではなく、各自がその授業を実践するときの糧となるような議論をすることを目的とする。

このような方法による授業研究は、参加者同士の話し合いから、各自が何かを発見し、授業者だけの学びではない、すべての参加者が学ぶことを模索したものである。授業者の指導案をみんなでたたくという従来の方法では、参加者全員の学びになり得ないからである。

II. 授業研究の実際

ここでは、2004年度の取り組みをたどってみる。まず、8月にこの研究会をアクションリサーチで行うことや、その方法について確認した。9月には研究授業の題材である「身の回りを気持ちよく」についての指導案を持参し、それぞれの実践を語り合い聴きあう会を設定した。参加者はすべて女性で、新任3年目の人から教員歴30年の人まで10名足らずの参加であった。

参加者には、指導案をもとに自分の「身の回りを気持ちよく」の授業について語ってもらった。高学年担当で他の教科の教材研究が大変であることから、通常家庭科の授業は指導書任せですすめられるという。そこで語られた参加者の授業案もすべて指導書をもとにしたもので、校内の汚れ調査（セロテープ使用）→掃除場所の決定・分担（計画）・掃除方法の検討→掃除実践→振り返り（報告会）→自宅の掃除計画という流れであった。ただし、同じ流れでも少しずつやり方が違っていった。たとえば、掃除をする班をいつもの掃除の班としたもの—あらためて班編成をしたもの、汚れを落とすために市販の洗剤を使用したもの—洗剤を使わないようにしたもの、掃除する場所を学校全体に広げたもの—家庭科室の周辺に限定したもの、事前に掃除方法を調べさせたり保護者の協力を仰いだもの、終わった後にご苦労様とティーパーティーを開いたものなど、そのときの子どもたちの取り組みの様子なども合わせて、様々な授業の方法を聴きあうことになったのである。1人10～15分、全体で2時間あまりの話し合いとなった。

参加者が語る子どもたちの様子は、会ったこともない子どもたちが目の前にいるような錯覚を

起こすほど一つ一つがとてもリアルであった。そして、そのときの私の役割はといえば、「どうして先生はそのような方法をとられたのですか?」「そのように考えられたのはなぜですか?」「そのときの子どもたちの反応をどう思われましたか?」といった問いを投げかけることであった。これらの問いに対しては、各自が言葉を捜しながら自身の考えをしっかりと話し、そこから議論が生まれるという有意義な会になった。

Ⅲ. 語り合い聴きあう学び

ここでの参加者の学びとしては、2つの点が挙げられる。一つは、聴きあうことによる学びである。日ごろ教師として小学生を前にして話をする多くの参加者が、他者の話を聴きながら、自身の実践を相対化することが可能になったということである。これは、聴きあうための共通の題材「身の回りを気持ちよく」があったことに加えて、これまで協力して授業研究を継続させてきたこの会のあり方によるものであろう。

さらにもう一つの学びは、参加者が批判的に自身の授業を振り返っていることである。「いろいろなすすめ方があり、自分の視野の狭さを感じました。どういう活動にするか決めるのは、教師の思い、どんな力を身につけさせたいのか、そんなことを感じてほしいのか、『身の回りを気持ちよく』の単元での目標がどこにあるのかによって決まるのだと思います。」(参加者感想)に代表されるように、自身の実践を批判的に検討し、どのような指導方法を選ぶかという選択の基準を自身でつくっていくことへとつながっているのである。澤本(1998)は教師の成長に欠かせない営みとして、リフレクションを挙げ、なかでも自分と対話する自己リフレクションと同僚性の高い仲間同士で行う対話リフレクション、集団リフレクションの双方が重要であるとしている。この会での参加者同士の学び合いは、澤本のいう集団リフレクションと考えてよいだろう。このリフレクションを通して、単に自身の授業を振り返るだけでなく、さらに自身の教育観、家庭科観を自覚化するようになった。なかでも、家庭科の目標については、議論の中で「家族へのおもいやり」「自立を促す」という二つの考え方が提示された。どちらを重視するかは、これまでの教師経験や、家庭生活の経験、現在おかれている状況などから導かれた考えによるものであることが、語り合いの中で明らかになった。あらためて教師は生き方を問われる職業であることを認識したのである。

Ⅳ. 授業案を考えるための視点

その後、11月には授業者による指導案の検討を行った。そこでの論点は次の二つに集約された。

①学校内での掃除体験の日常生活への転移について

学校で行う掃除体験は日常性が低いほうが、つまり非日常的で、イベント性の高いほうが、子どもたちの取り組みはよくなる。しかし、その場合、日常生活に還元する方法、つまりイベントとして一回きりの掃除体験に終わらせない方法が必要となる。幸い対象校では学年縦割りの掃除班が編成され、高学年として下級生を指導する役割を担っている。そこで、この掃除班で授業で行った方法のうち使用可能な方法を伝授し、日常的に実践することを考えた。この一連の議論は、授業者が「日常への転移」を強く自覚することを促し、掃除実践のあとも使用した掃除グッズを教室内におき、子どもたちが日常的に使用する環境を作り出す実践へとつなが

った。

②報告会における学びの共有化について

生活科や総合的な学習の時間で多く行われているグループ別の発表と、全体で順にすべてのグループの報告を聴く発表方法は、どちらがよいのであろうか。掃除実践が単なる体験ではなく、教科の学習として意味を持つためには、個々の学びが全体で共有されることが不可欠である。

授業者は、以上の2点を中心に研究授業を考えていった。

V. 授業者の学び

以上のような授業研究を通して、授業者はなにを考え、学んでいったのであろうか。ここでは、最終的に作成・実践した指導案を示しながら、授業者自身にその軌跡を振り返ってもらおう。

子ども一人一人の学びを工夫し、生活する力を身に付ける学習指導の研究

「身の回りを気持ちよく ～ピッカピッカ大作戦～」の実践から 鴻巣南小 中野玲子

1、はじめに

小学校家庭科では、「衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、家庭生活への関心を高めるとともに日常生活に必要な知識と技能を身に付け、家族の一員として生活を工夫しようとする実践的な態度を育てる」ことを目標としている。すなわち、よりよい生活をめざして生活を工夫しようとする実践的な態度を育てることが、最終的な目標である。

しかし、日々の学習指導において、子ども達が学校で学んだことを家庭生活中で生かし実践していくことができるよう指導していても、なかなか思うようにいかないのが現実である。学校で意欲的に学習に取り組んだのにも関わらず、関心が持続せず家庭実践に結びつかない。折角身に付けた知識や技能を自分の生活に生かすことなく終わってしまうのである。

そこで、子ども達の生活の基盤である家の「住」に目を向け、「身の回りを気持ちよく～ピッカピッカ大作戦」の授業実践を通して、子ども達が生活する力を身に付けられるよう研究を行った。

2、事前研究会から

この授業実践にあたり、事前の研究会を3回行った。ここでの実践に基づいた話し合いは、私にとって授業を組み立てていくときのよい指針となった。事前の研究会から、私が授業を行う際に参考にしたこと、私なりに考えたこと等を述べる。

- ①「身の回りを気持ちよく～ピッカピッカ大作戦～」の目標・授業を通して子ども達に身に付けてほしいことを明確にし、それを意識して指導にあたる。
- ②授業の流れは、子どもの思考に無理のないものを考える。
- ③普段の掃除場所を見直す実践ではなく、汚れ探しをした後掃除の実践場所を自分で選ばせ、学習への興味・関心や実践意欲の持続を図る。
- ④ねらいに迫る報告会となるように学習カードを工夫し、子どもが自信をもって発表できるように「発表の仕方」を指導する。
- ⑤イベント的な要素が多い掃除実践をいかに日常的にしていくかが重要である。
- ⑥掃除後の実践報告会を行う際、クラス全員で一斉に行い、情報の共有化が図れるようにする。

⑦子ども達が報告会で発表した内容を教師側で整理して子どもに提示することにより、子ども達の学びをより確かなものにする。

以上、これら7項目を踏まえて授業を組み立てていくことにした。

3、子どもの実態と題材について

学校生活や家庭生活において、子ども達が身の回りの環境を整える活動に取り組む機会は比較的多い。事前の調査によると、意外にも子ども達は掃除することに対して前向きで、約8割の児童が、「学校でも家庭でも掃除をすることは好き・どちらかというが好き」と答えている。これは、本校では学年縦割り（2～6年）で清掃を実施しているため、高学年としての自覚をもって掃除をしている児童が多く、清掃に関する意識が比較的高いからだと考えられる。家庭でも自分の部屋や玄関・風呂場・居間等の掃除の経験があり、母親と一緒に掃除をしている子どもも多く、1学期の学習を生かして、家庭で掃除の実践に取り組んだことが影響していると思われる。

ただし、「なぜ、掃除をするのだろうか」という質問には、約9割の子どもが、「きれいにするため」と答えていて、「掃除をするといつでも気持ちよくいられるから・居心地がいいから」と答えた子どもは、わずか1割に過ぎなかった。すなわち、学校や家庭での掃除は、「与えられた時間だから」「家の人に言われたから」という半ば義務感で実践している子どもがほとんどであると言える。

そこで、本題材では、身の回りや家庭生活の快適さという視点で、これまでの学校や家庭での自分の掃除の仕方を見直し、自分が見つけた快適にしたい場所を整えることができるように、掃除の仕方を工夫することにポイントをおいて指導していくことにした。表1に指導計画を示す。

表1 「身の回りを気持ちよく ～ピッカピッカ大作戦～」指導計画（7時間扱い）

時	小題材名	○ねらい
1	学校の汚れをつかまえよう	○学校のさまざまな場所の汚れの原因や汚れ方、清掃の必要性を理解することができる。
2	南小ピッカピッカ大作戦	○南小ピッカピッカ隊での調査をもとに、掃除する場所を決め、清掃の仕方を考えることができる。
3		○南小ピッカピッカ大作戦の計画をもとに、場所や汚れにあった掃除ができる。
4		
5	ピッカピッカ報告会の準備をしよう	○南小ピッカピッカ大作戦の報告会の準備をすることにより自分の掃除の方法を振り返り、掃除の方法についてより深く考えることができる。
6	ピッカピッカ報告会	○南小ピッカピッカ大作戦の成果を報告しあい、掃除の仕方について理解を深める。
7	わが家ピッカピッカ大作戦	○南小ピッカピッカ大作戦の成果をわが家ピッカピッカ大作戦に生かし、清掃計画を立てる。
☆ 家庭での実践（冬休み）☆実践をポスターにまとめ、掲示して全体に広める。		

4、子どもの学びを確かなものにする報告会にするために・・・「ピッカピッカ報告会（第6時）」

表2は、「ピッカピッカ報告会」の展開の部分である。指導するにあたり、ポイントを次の3点に絞った。

☆重要なことを落とさず分かりやすく報告させる方法

報告会を実施する前に1時間の準備の時間を設け、報告内容を学習カードに記入し、それを各グループで工夫して伝えるようにした。工夫の例として掃除の実演、掃除グッズの実物を見せる、デジカメで撮った掃除前後の写真を見せるなど例示した。

☆ねらいに迫る報告会の聞き方

報告を聞く際、3つの観点①自分とは違う場所の掃除の仕方について分かったこと②自分もやってみたいこと③家の掃除でも使えることを提示し、報告を聞き流すことのないようにした。

☆子どもの報告をねらいに迫らせる指導のあり方

報告会を通して子ども達に学んで欲しいことを、報告会の発表内容から整理し「場所や材質・汚れによって掃除の仕方が違う」「身の回りをいつも快適にしておくには、普段からこまめに掃除をすること」「掃除をした後気持ちよさを感じるから、掃除は楽しい」「これからの生活に生かせるようにすること」の4点とした。

5、授業実践を終えて

授業の導入で学校の汚れを調べる活動を行ったが、子ども達は想像以上の汚れに驚いていた。この驚きが、掃除の必要性につながり、自分が快適にしたい場所を主体的に選択することができた。「掃除をしたい」「きれいにしたい」という気持ちがどの子にも湧き、その後の活動がスムーズに進んでいった。学習カードに掃除をしたい理由・使用する用具・掃除の仕方等を記入し、掃除をする目的・手段がはっきりしていたため、意欲的に掃除に取り組めたのだと思う。「カードに書く」ということで、自分の活動をきちんと認識することができたと考えられる。

学校での掃除の実践を通して、子ども達はいろいろなことを実感することができた。自分の計画通りに掃除をしてきれいになると、とても気持ちがよく爽快感があること、汚れがひどいとそれを落とすには大変な労力があるので、日頃からこまめに掃除をするほうがよいこと、掃除の仕方はいろいろあり場所や材質により違うということ等、実践後の感想に多くの子ども達を書いてきた。やはり、体験や実践を通して子ども達は主体的に学べるのだということはこの授業実践を通して、私が実感することができた。まさに「体験に勝るものなし」である。

今回の授業は、報告会の仕方を重点に進めた。初めは、ワークショップ形式で行おうと思っていたが、情報の共有化を図り教師がしっかり指導するには、一斉での報告会のほうが効果的であるとの研究会での話し合いからこのように実践してみた。ワークショップ形式では、発表することには満足感が味わえるが、聞くことにおいては、十分ではないと思われる。一斉での報告会だったので、一回だけの発表のため伝えたいことを落とさずに報告しようと集中してできたのではないと思う。また、教師も子ども達を把握しやすく、学んでほしいことを落とさずに指導することができた。ただ、今回の授業で心残りな点は、「場所や材質によって掃除のしかたが違うということと掃除の基本の押さえ」が甘かったということだ。言葉として子ども達は理解しても、実感としてきちんと理解させるには十分でなく、工夫をしなければならぬと感じた。

「授業経験を語り合い聴きあう」授業研究のこころみ

【本時の目標】

- ・南小ピッカピッカ大作戦の実践報告をし合い、そうじの方法について理解を深め自分の生活に生かそうとすることができるようにする。 〈生活への関心・意欲・態度〉 〈生活を創意工夫する能力〉

表2 【授業の展開】

	学習内容	時間	学 習 活 動	教師の働きかけと評価	資料等
つ か む	本時の学習の確認	2分	○本時の学習内容を知る。	○自分の実践で大変だったことや工夫したこと等を思い出させる。	掃除の様子 の映像 (パワーポ イント)
	南小ピッカピッカ大作戦の報告会		<p style="text-align: center;">ピッカピッカ報告会 そうじのコツを見つけよう!</p> <p>○南小ピッカピッカ大作戦の報告会をする。</p> <p>○南小ピッカピッカ大作戦の実践を報告しあい、友達の実践のよいところを見つけることを知らせる。</p> <p>○学習の共有化を確実にするために、一斉に報告を聞くようにさせる。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>【教室内】 扇風機ピッカピッカ隊 窓の棧ピッカピッカ隊 敷居ピッカピッカ隊 窓ピッカピッカ隊 テレビ・ロッカーの裏ピッカピッカ隊 電気の量・教室の上ピッカピッカ隊</p> <p>【家庭科室】 食器棚ピッカピッカ隊 椅子の裏ピッカピッカ隊 ガスコンロピッカピッカ隊</p> <p>【教室外】 トイレピッカピッカ隊 流しピッカピッカ隊 昇降口ピッカピッカ隊 階段ピッカピッカ隊 渡り廊下ピッカピッカ隊</p> </div>	○南小ピッカピッカ大作戦の実践や友達からの情報をもとにこれからの生活に生かせることを考えさせ、家庭での実践に意欲がもてるようにする。	
深 め る	南小ピッカピッカ大作戦の報告会の感想	5分	○実践して気付いたことや感想、工夫したことや困ったことなども報告する。	○そうじの仕方や汚れの落とし方・使った用具・工夫したことや困ったことなどをわかりやすく伝えるようにさせる。	南小ピッカピッカ隊 報告会カード 報告のた めの資料
	報告会から得たことを今後に生かす	10分	○報告を聞きながら、友達の実践の仕方や掃除のコツを見つけ、学習カードに記入する。	○自分の実践と比較しながら、友達の掃除のよいところや掃除のコツを見つけることができるようにする。	
ひ ろ め る			○報告会を通して掃除の仕方についてわかったこと・やってみたくこと・自分でも使ってみたくこと・感想などをまとめ、発表する。	○友達の報告の中で、自分の生活に生かせることはないか考えるよう助言する。	
			○本時のまとめをする。 ・ピッカピッカ隊で学んだこと ・今後の生活に生かせること	○報告会の感想を発表し合い、実践の成果をお互いに認め合うことができるようにする。	
生 か す				○南小ピッカピッカ大作戦の実践や友達からの情報をもとにこれからの生活に生かせることを考えさせ、家庭での実践に意欲がもてるようにする。 ・場所や材質・汚れによって、そうじの仕方が違うこと。 ・身の回りをいつも快適にしておくには、普段からこまめにそうじをすること。 ・そうじをした後、気持ちよさ居心地のよさを感じるからそうじは楽しい。 ・友達の報告を聞いて、自分でもやってみたくこと使ってみたくことなど、これからの生活に生かせるようにすること。	
			評価規準	・南小ピッカピッカ大作戦の実践報告から掃除の方法について理解を深め、自分の生活に生かせることはないか考えている。(関心・意欲・態度) (創意工夫) (観察・発表・学習カード)	
			十分満足できる	・南小ピッカピッカ大作戦の実践報告から色々な掃除の方法について理解を深め、自分の生活に生かそうと意欲をもって考えている。 → 色々な掃除の方法について理解し積極的に自分の生活に生かそうとしていることを賞賛するとともに、自分の家を快適にするとしたら何処にするかを考えるよう伝える。	
		おおむね満足できる	・南小ピッカピッカ大作戦の実践報告から他の掃除の方法について知り、掃除のコツを理解している。 → 色々な掃除の方法についてわかったことを自分の生活に生かすよう助言し、家庭での実践について考えられるようにする。		
	次時の学習内容	1分	○次時の学習内容を知る。 ・「わが家ピッカピッカ大作戦」の計画を立てること	○報告会で得たことを、家庭での実践にも生かしていけるようにする。 ○家のどんなところをピッカピッカにしたいか考えることにより、学校から自分の家へと視野を広げて取り組んでいけるようにする。	

6. まとめ

研究会での事前の話し合いが、今回の授業実践に大いに役立った。参考にした7つの項目のうち、特に①⑦のこの授業を通して子ども達に身に付けて欲しい力を明確にして指導すること、⑤⑥の非日常的な学習をいかに日常的にし生活化させていくための子どもへの働きかけの大切さを感じた。私たち教師は、年を追うごとに多くの授業実践を経験している。しかし、それをきちんと認識することは少ない。自分の授業実践を客観的に分析することの必要性も痛感した。今後も、子ども達によりよい生活をめざして生活を工夫しようとする実践力を身に付けることができるよう努力していきたい。

「先生、はいこれ。」と男の子が私に差し出した議題カード。そこには、「みんなで教室の床をきれいにしたい。家庭科では、床をきれいにできなかったから。」と書かれていた。話し合の結果、3学期の終わりに掃除をし、新5年生にさわやかな気持ちで教室に入ってもらおうと計画を立てた。授業をしたから「はいこれで終わり」ではなく、時々教師から子ども達に刺激を与えたりイベント的な活動をしたりして、学校で学習したことを生活に生かす機会をもつように働きかけていきたい。

VI. 参加者の振り返り

では、研究会の他の参加者は、なにをどのように学んだのだろうか。家庭科担当初年度の参加者、教師経験30年のベテランの二人の振り返りを順に報告する。

1. 家庭科担当初年度 田中(久保)美里

☆教師のもつ二つの役割

研究会の中で、話された「教師が教えることには、二つの役割(デザインする・その領域に精通する)がある」(Gary R.Morrison Steven M.Ross Jerrold E.Kemp 2001)というお話、まさに目から鱗…でした。教師の仕事には、「新しい考え方や知識を教える」他に、どうやったら子どもたちにとってわかりやすいのか、新しい考え方が子どもたちの頭にスッと入っていけるのかを考える「授業をデザインする」ことがある。なるほど!と思いました。この両者が車輪のごとく連動し、均衡がとれてこそ、授業が成り立つのだと感じました。

私は、小学校の教員です。お料理教室の先生や、お掃除のプロのような技術はありません。しかし、子どもたちの実態は分かっている。だからこそ、一人の教員として、新しい考え方や知識をどんどん吸収して、それを咀嚼し、子どもたちに分かりやすい形で再構成していく。それが、私たちの仕事であり、やりがいであり、私にはまだない「技」なのだな、と感じています。いつかは私も、そんな「技ありな教師」になりたいです。

☆そうは言っても現実とは…

普段は、学校の行事や授業に追われる毎日で、「自分は教師として子どもたちに何をどうしたいのか。」という根本的な問題を考えたことがほとんどありませんでした。しかし、本来は、こうした根本的な理念がとても大切で、そうしたものがきちんと確立出来た上で、具体的な指導方法を考えていくべきなのでしょう。学生の時には、色々な本を読み、教育とは…と熱い想いを抱いていた私が、いつのまにかHow toばかりを気にして、肝心なことから逃れようとしていたことに気づきました。

そうは申しましても、やはり現実の毎日は大変忙しく、なかなか「自分は教師として…」と考える時間を取ることは出来ません。だからこそ、今回のような部会が私にはとても貴重な時間で、刺激的な一時でした。

☆初めての家庭科

特に家庭科に関して、自分をふり返ってみますと、教師の1つ目の役割である「新しい考え方や知識を教える」部分さえもままならない状況です。今年、教師になって3年目を向かえ、初めて高学年を担任している私にとって、「家庭科」は初めて教える教科であります。また、両親と同居している私にとって、「家庭の仕事」自体が自分の生活から遠くかけ離れたところに存在すると言っても過言ではないのです。

そのような私が、いかにして授業を行ってきたか。それは、事前に指導内容を自ら学習してやることでした。ミシンの使い方を教える前日には、恥ずかしながら、自宅で下糸の出し方や返し縫いの練習をしました。翌日の授業が始まり、児童の前で下糸の出し方の見本が成功したとき、心の中は安堵のためいきでいっぱいでしたが、表向きはいたって冷静を装い、余裕の表情を浮かべていたことを覚えています。家庭科指導1年目の私にとって、毎回、自分自身が学習して、授業の準備をすることで、「新しい考え方や知識を教える」役割は、何とか担えるようになりつつあります。

児童も教師も、実際にやってみることから学習は始まるのではないのでしょうか。研究会の中でも、河村先生を始め、家庭科教育に精通している先生方の前で、自分の意見を述べることは、やはり緊張する経験ではありました。しかし、私の意見に対して、「なるほど。新しい考え方ですね。」と認めてくださったり、「そういう時は、こうしたら良いのでは？」などとアドバイスをいただいたりすると、発言してよかったなと感じるものです。そんな時、「子どもたちも、いつもこんな気持ちなのだ。」と児童の心情が理解できたりもします。

☆単元「身の回りを 気持ちよく」の目標について、もう一度自分なりに考えてみました。

研究会の中で、家庭科教育の目的について、話をしたことがありました。家庭科を勉強しながら、「家族のありがたさ」に気づいてほしいという先生と、「自立」を促したいとお考えの先生がいました。私は、5年生の段階では、「自立」という点に重心を置いても良いのではないかと考えます。

まずは、家の仕事にはどのようなものがあるのかを知り、その中で自分たちにできることがこんなにあるんだと気づいてほしいのです。そして、自分に出来ることがどんどん増えていくことを感じながら、自分の成長に気づくことで、「自立」への一歩を踏み出して欲しいと思うのです。

もし、「出来た」という達成感や成就感を味わうことで、家の仕事って楽しいな。気分が晴れ晴れするな。と感じてくれれば、「よし、家でもやってみよう」と思うでしょうし、「出来ない」「大変だ」と思えば、「親は毎日こんなに大変なことをしてくれているのか。」「家族ってありがたいな」を自然と感じてくれるのではないのでしょうか。そうした思いが6年生になって「家族のありがたさ」を実感する学習に発展していけばよいと思います。

☆中野先生の授業をふり返って

①やりっ放しで終わってしまいがちな発表形式の授業に対する懸念と対策

家庭科だけではなく、どの教科でも、発表することで満足し、終わってしまう授業が確かに多

いと言えます。それでは、発表をした子どもは満足でしょうが、聞いている子どもの学びは深まっていません。

今回の中野先生の授業では、一つのグループの発表が終わる事に、教師からのコメントが入りました。あの一言が、子どもたちの頭にバラバラに流れてくる知識を整理し、スッキリさせる役割を果たしていたと思います。これが教師の「授業をデザインする」役割であったと思います。つまり教師の「授業をデザインする」役割の一つに、「新しい考え方を整理する」ことがあり、その方法が大変有効であったと言えます。

②一人の教師として、単元「快適な住まい方」を通して、子どもたちに何をどう教えたいのか

中野先生の授業では、まとめの中で、子どもたちに教えたいことを3つに絞って黒板に提示していました。私は、すっきりとしていてわかりやすいと感じました。子どもたちの主体性を大切にするために、子どもたちの言葉で授業のまとめをする方法もあります。しかし、その場合、授業のねらいが不明瞭になってしまい、子どもたちの頭の中がスッキリしないまま終わってしまうのではないのでしょうか。やはり、教師の方から、「みなさんの考えをまとめると、こうなりますね。」という形で、提示した方が、明瞭で良いと考えます。

但し、このように教師から学習のまとめを提示する場合には、授業の展開の中で、児童の考えを十分に上げたり、議論させたりした上で行わなければ、ただの押しつけになってしまう危険性もあると思います。教師と児童が一緒になって授業を創り上げた上で、教師はクラスの意見をまとめているのだということを児童が受け入れてくれるような、自然な形で学習のまとめを行う必要があります。今回の授業では、児童の発言と教師の用意したまとめがうまく合致していたと思います。

また、本単元を通して何を教えたいかを、教師が明確にしておくことが、何より大切であると本研究会に参加させていただく中で強く実感しました。私としては、研究主題にもあるように、子どもたちに「生活する力」を養わせたいと考えています。従って、本単元では、気持ちよく快適に過ごすために、掃除の仕方や必要性を学び、それを日常生活の中で実践してほしいと願います。

2. 教師経験30年 加藤久子

☆はじめに

授業研究会を開くにあたって、今までの経験では授業者が指導案を用意し、参加者は、その指導案について意見を述べたり、一緒に学習活動を考えたりしてきました。今回授業研究会のための話し合いが、まったく違った方法で行われた事に驚きであり、自分自身のためには大変勉強になりました。

☆授業についての話し合い

話し合いをもつにあたって、参加者一人一人が持ち寄って研究授業を行う単元について、今までの体験や「自分だったらこう授業をやってみたい」「こんな実践をしてきた」というものを持ち寄りました。持ち寄ったものは、同じ単元であるにも関わらず、また、指導書通りの実践であってもバリエーション豊かなものでした。導入では児童に目的意識や課題意識をもたせるための工夫が見られました。実践計画での、取り組む清掃場所の選択一つをとっても、「いつも掃除している場所」「教師の指定場所」「児童に課題をもって探させた場所」「指定範囲での選択」等々。教師

の思いや意図が反映されるものなのだなと感心しました。掃除方法の発見については「換気扇を石鹸で」「トイレを酢で」「レモンやオレンジを使って」がりましたが、実際にこの単元の授業を実践して困ったことの一つが解決しました。それは、掃除の技術的なことでした。箒の使い方や雑巾の扱い方などの基本的なこと以外に、児童が探してきた様々な掃除場所をきれいにする方法です。新しい手作りグッズの知識を増やしたほかに、洗剤代わりに使えるものをたくさん知ったことです。洗剤を使わずに行うことで環境教育の指導をもできるということが驚きでした。自分は、掃除の実践が中心になるため、きれいにすることを目的とするあまり、市販の洗剤を使っていた児童への助言がなされなかったことに気づかされました。

さらに、発表の仕方では、「デジカメの活用（汚いからきれいへの変化）」「共有化（他の人の発表を聞いて自分のものに）」という方法や考え方がありました。発表を聞いたり見たりすることで、自分もやってみたいと感じたり、そんな方法もあったのかと知識を増やしたり、次への広がりになるような工夫をすることを学びました。

☆授業者の指導案検討について

授業研究会のための指導案検討会であるので、今までは、先ず「指導案の読み合わせ」とか「授業者の意図説明」から始まり、それぞれの意見を言い合う形で進んできました。ところが、今回の検討会では指導案の内容に入ったのは最後で（それもほんの少し）、授業者は参会者の実践報告や話し合いの内容から、授業に参考になりそうな事をつかみとって、研究授業へともっていきました。いろいろな形で参考にできたのではないかと考えます。

☆公開授業研究会を終えて

公開授業を終えて、参加者全員で話し合った中から印象に残ったことを述べたいと思います。

①支援と指導

教育課程の改善以降、『教えることは悪で、子どもたちの能力を引き出すために支援をするのが教師の仕事である。』というような風潮が増え、多くの授業が「指導」から「支援」へ変化してきました。今回の授業研究の中で、「支援という言葉に逃げて、指導を手放しているのでは」という意見に驚くと共に、そのような風潮に流されつつある自分を発見して愕然としました。

適切な指導には、教師が子ども達をこう育てたいという信念がなければなりません。また、授業で、何をどのように教え、子ども達に何を考えさせ身につけさせるか、はつきり掴んで向かい合うことが必要です。それが教材研究であり、今回の研究会に参加して教材研究を深めることができ、どう指導していったらよいか掴んだように思いましたので、自分も来年は5年生をもって、この授業をやってみたいと考えました。

②指導が一本貫かれることにより、共有化が図れる。

教師の意図、指導方法、学習形態によって共有化が図れ、共有化により子どもたちは多くを学ぶことを今回の授業で強く感じました。学習過程の工夫により、「多くの体験を通して子ども達に生きて働く力をつけさせたい」という、教師の意図が伝わりました。また、子ども達がそれぞれ発表したものに、教師が適切なコメントを加えたことによって発表者の考えが聞き手にはっきり伝わり、個々の発表が全員のものになりました。ここでもはっきりと指導がなされていました。

③教師のコメントにより子どもたちの意識が継続したこと。

指導過程の中での学習プリントに教師が朱を入れており、子どもたちは「常に先生が自分を見て

いてくれる」という喜びが活動の意欲につながっていました。日頃学習すべてに通じることで、コメントがあるのとないのでは大きな違いが表れます。プリントやノートを返却した時、真っ先にコメントを読む児童の姿から、自分は必ず言葉を書くようにしています。伝えたい、認めてもらいたいという子どもの意識を大切にすることも大切です。体験をさせっぱなしでなく、伝える場の確保をしたいと考えます。伝えたことに対する教師のコメントの重要さは、今回の授業の通りです。

④教師も新しいことを学ぶわくわくドキドキが大切。

教師の学ぶ姿勢が子ども達に反映するので、新しいことを学ぶ姿勢を崩さずに行こうと改めて感じました。それには、今回のような意欲的な研究会に進んで参加することです。同じ教材で、多種多様な指導方法が考えられ、本当に勉強になりました。繰り返し高学年を持っていると、何度も同じ教材を指導することになりますが、その都度新しい試みをしていきたくなりました。これからの家庭科の授業は、いつの日か子どもたちの生きる力として役立つことを考えながら、組み立てていこうと考えています。

VII. 参加者の学び

以上の報告にあるように、語り合い聴きあう授業研究会では、参加者が多くのことを学んだ。その学びは参加者によって様々であるが、授業研究会の参加者全体の学びは、以下の4点に集約することができる。

(1) 他者の授業を観るという行為

通常、教師は他者の授業を観ることはほとんどない。校内研で行われる研究授業や、公開授業に参加するなど、その機会は限定される。今回の公開授業研究会も、その限られた機会の一つと考えることができる。公開授業後の検討会で「授業者の反省」に象徴されるように、通例、授業者は一方的に授業を批評され反省を強いられる存在であり、参観者は批評するだけという役割分担となる。しかし、今回の公開授業研究会は、単に参観して批評するというだけではないという点ですべての参加者にとって新たな意味を持ったと思われる。他者の授業を観るという行為は、単に批評者として観る場合は、その授業のよいところを探すことが難しくなり、自分がこの授業をすればとしたら、という自分に引き寄せた思考が困難になる。今回のように自身の実践を語り合い聴きあうことによって授業案の共有化が可能になり、授業のよい点を見つめた上でさらに改善すべき点を共有することが可能となったのではないだろうか。これは、一つの授業を共有することを基盤とした集団リフレクションであると考えられる。

(2) 授業目標の明確化

家庭科の授業に限らず、授業の目標を明確にすることは重要である。しかし、日常的には、とりえず授業をこなしてしまうということも多くある。家庭科の授業は体験的な学習・実習が多いため目標を明確にしなくとも授業として成立することが多い。日常のすべての授業目標を明確化することは無理としても、「授業はその目標を明確にすることによって、その指導方法や評価方法を選択することができる」という授業づくりの基本を再確認した。

(3) 教師自身の学びを文章にすることの大切さ

教師の成長は、自身で振り返ること＝リフレクションから始まる。浅田(1995)は授業を振り返る方法として、授業日誌法を推奨している。これは自身の授業を対象化し言語化することを目

的としたものである。この研究会では活発な議論が行われる一方で、会の振り返りを文章化することを共通課題とした。これは、教師が自分の意見を述べるだけでなく、それを文章にして再考するという営みであり、自己に向き合う方法である。時間をかけて文章にすることで、自身の考えをより明確にすることが可能になったと思われる。

(4) 子どもと共に授業を創る楽しさを大切にすること

中野先生の授業は、教師も子どもたちも生き生きと楽しい雰囲気満ちていた。多くの先生が感想に挙げているように、子どもたちが自信を持って発表し、その一つ一つに先生が愛情をこめてコメントを加えるという発表会であった。このことは、なにより一連のこの授業の活動が子どもたちにとって楽しいものであったこと、そして教師にとってもワクワクドキドキする授業であったことを示している。公開授業研究会後の話し合いでも話題になったように、教師のワクワクドキドキは子どもたちのそれと共鳴する。教師は教える人であると同時に自身も新しいことにチャレンジする人でありたい。

授業後に中野先生は「私が授業研究をがんばっている後姿を見せることで、子どもたちが意欲的になったようです。」と話された。子どもたちは、中野先生のチャレンジする姿をモデルとして自分たちの課題に意欲的に取り組んだのであろう。参観者からの「クラスが一体化していてうらやましい」という感想は、このようなワクワクドキドキの共鳴をうらやむものである。

VIII. おわりに

以上、鴻巣地区小学校家庭科研究会の授業研究の様子とそこでの参加者の学びを報告した。教師は一人で成長するのではなく、相互の真摯な関わりの中で自分自身を成長させていくものであるということを、あらためて実感することができた。しかし、現実には教師同士が話をする時間さえ少なくなっていると聞く。本来授業は、教師が目前にいる子どもたちを思いながら、目標を明確にしてじっくり取り組むものである。そのためには教師同士の学びや、多少の寄り道や無駄と思われるような緩やかな時間の流れも必要である。本研究会は、参加者の入れ替わりを経ながらも、参加者の子どもを思う気持ちと授業をよくしたいという熱意によって活動を続けてきた。この語り合い聴きあう授業研究が、厳しい状況にさらされることなく、今以上に緩やかに継続されることを願わずにはいられない。

<参考文献>

- 浅田匡「自分の授業を見直す―授業日誌法の活用―」 浅田匡、生田孝至、藤岡完治編、『成長する教師』金子書房 1998 p147-160
- Gary R.Morrison Steven M.Ross Jerrold E.Kemp, Designing Effective Instruction 3rd Edition, John Wiley&sons,Inc. 2001
- 伊藤葉子他 アクションリサーチで授業を変える 月刊「家庭科教育」2003, 77巻3号-7号
- 伊藤葉子「授業研究における教師の学び」 大家家庭科教育研究会編『市民が育つ家庭科』ドメス出版2004 p138-148
- 澤本和子「授業リフレクション研究のすすめ」 浅田匡 生田孝至 藤岡完治編 『成長する教師』1998 p212-226